

科学雑誌ニュートンとの出会い

電子システム工学科 増田 隆

昭和五十六年の事である。私が内地留学で京都大学にいた時の四月、今までに無い写真とイラストのリアルな科学雑誌が発刊されるという噂が聞こえてきた。その噂は教授からだった。大学内ではその噂があちこちで囁かれていた。図書館や食堂など大勢の人が集まる場所ではこの噂が誰と無く話し声の中に混じっていた。

それから一ヶ月余りたった頃、各書店で注文を受けているという話が飛び交っていた。そうこうしているうちに一ヶ月程度がたち、いよいよ書店に並ぶという噂が濃厚になり、販売前日は内容が気になり早く見たいという気持ちで余り眠れなかった。次の日、教授が鞆から科学雑誌「ニュートン」を取りだし、講座の助教授や助手や私そして大学院生に見せてくれた。一瞬私は思った。この手の本は今まで無かったと……。内容を見るなり早速近くの書店に注文した。しかし、注文が多くて手にはいるかどうか約束出来ないと言う。だけど仕方ないので注文した。二週間程度たった頃、講座の研究室に電話がかかった。何とか入りましたという内容の電話。早速代金を持って買いに行った。今まで、不自由なく本が買えていたが、一冊の科学雑誌本を買うのにこれほど大変な思いをしたのは初めてだった。このように、苦労して購入した本だったので端から端まで全部読みあさった。関心のある所は何度も読み返した。これが私にとって、科学雑誌「ニュートン」との出会いである。その後、毎月購入して二十八年間が過ぎた。現在も購入しつつ端から端までしっかり読んでいる。私が創刊号から購入している科学雑誌はこれだけである。この雑誌によって地球の自然や天体そしてミクロの世界など、いろいろな自然科学の多くを教えてもらった。

内容を一部紹介すると、創刊号は昭和五十六年の七月七日に発行され、その前に第一巻0(ゼロ)号が五月五日に発刊されている。0(ゼロ)号は特別寄稿として江崎玲於奈博士の「エサキダイオードが生まれるまで」や「銀河系のすべて」などが紹介され、竹内均編集長が采配する八百円の月刊誌(現在は千円)。四十二ページには江崎博士の若き日の写真が、薄膜結晶を作る超高真空分子線結晶成長装置の横で活気溢れんばかりに写っている。これ以外にも特別取材されたスミソニアン博物館や近代科学の夜明けに輝く巨星「アイザック・ニュートン」等の記事が所狭く描かれている。さらに内部の写真やイラストがリアルで素晴らしさを感じた。また、第一巻一号として発刊された創刊号は二ヶ月遅れで発刊され、内容は「太陽系の神秘」や「遺伝子細胞」そしてニュートンスペシャル「万有引力」が目をつけた。

また、異分野では寺嶋祐二氏の漫画雑誌「ダイヤのエース」を創刊号から愛読している。著者の寺嶋祐二氏とは二昔前、少年野球の選手とコーチの関係でもあった。現在、寺嶋祐二氏は新進気鋭の漫画家に成長しつつある。